【特集】…1

座談会

だから古書はおもしろい！

～旅行案内書から見る日本のリアル～

荒山正彦　関西学院大学 文学部教授
×
山口　誠　獨協大学 外国語学部交流文化学科教授
×
木田拓也　武蔵野美術大学 造形学部教授

進行○塩谷英生（公財）日本交通公社
大隅一志（公財）日本交通公社
構成○福永香織（公財）日本交通公社
編集協力○井上理江
写真○村岡栄治

古書との出会い

事務局…本日お集まりいただいた先生方には、当館が所蔵する古書をご活用いただいているだけでなく、それぞれの専門のお立場から古書の多様な価値を教えていただきました。そこで、本日は改めて古書を

ひもとく意義や古書から得られる示唆などについて考えてみたいと思います。まずは、最初に、先生方と古書との出会いについてお聞かせいただけますでしょうか。

荒山…私は大学院生の時に「近代日本の国土空間の形成」を研究テーマにしていて、地理的に日本がどう認識されていたのかを考えるために、古い旅行案内書を手にしました。旅行案内書では対象の姿がデフォルメされ魅力的に書かれているので、当時の人びとの認識がそのまま反映されているとは限りませんが、資料のひとつとして価値があると思い、関心を持ち始めました。

山口…私はメディア研究の出身なので、メディアとしてのガイドブックの歴史に興味があるのですが、いま荒山先生がおっしゃったとおり、ガイドブックは観光地をよく見せる部分もあれば隠す部分もあり、その時代の旅のあり方を活写した重要な資料だと思います。これまで人々がどういう観光を欲していたかを知るには、統計など数字の資料を使うよりも、面白い視点が得られることが多いように思います。

木田…私は現在、美大に所属していますが、その前は美術館で長く勤務していました。工芸やデザインが専門なので、ツーリズム関連の書籍の内容というよりも、表紙やデザインなどに関心を持っています。

私は日本の工芸史も研究していますが、工芸家の年譜などを見ると、昭和初期に朝鮮半島や満州を訪れたという記録がよく見られ、より詳しく内容を知りたいと思い、植民地や外地のガイドブックを探すようになりました。観光関係の古い本は印刷も今とは違って独特の風合いがあり、広告などもすごく面白く、当時の空気感が感じられます。

古書からわかること

事務局…色々な古書をご覧になっているかと思いますが、特にご自身の研究に大きな影響を与えた一冊があればご紹介いただけますか。また、古書をひもとくことでどういったことがわかるのでしょうか。

荒山…およそ20年ほど前から、外地や植民地への旅行関係の資料を集めはじめました。1931（昭和6）年5月に、東京鉄道局が主催して一般に募集した朝鮮と満洲への約2週間の団体旅行があったのですが、この団体旅行の記録『**鮮満の旅**』を古書店で手に入れたことが、漠然とイメージしていた外地・植民地への旅行にリアリティを感じるきっかけとなりました。

『鮮満の旅』には、周遊ルートや集合写真が掲載されていたのですが、それ以上に、本の持ち主がプラ

荒山正彦

関西学院大学 文学部教授

大阪大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。専門は人文地理学、旅行の文化史。近代期の旅行案内書55点を復刻した企画『シリーズ明治・大正の旅行　旅行案内書集成　全26巻』（ゆまに書房、2013～2015年）や、ジャパン・ツーリスト・ビューローの雑誌『ツーリスト』の復刻（ゆまに書房、2017～2018年）の監修と解説を行った。近著として『近代日本の旅行案内書図録』（創元社、2018年）。

『近代日本の旅行案内書図録』
荒山正彦、創元社、2018年

『紀念スタンプ印集』
（旅行スタンプ帳）1931年

イベートで撮影したスナップ写真や、個人名がはいった「**鮮満視察回遊乗車券**」がはさまれていました。また後には外地や植民地を旅行した際の御朱印帳のような**旅行スタンプ帳**も手にしました。こうした旅行記録やスタンプ帳など、人々の旅行の痕跡みたいなものに出会った事が、その後の研究につながったと思います。

また同じ頃に、鉄道院によって編纂された全5巻からなる英文の旅行案内書 ***An Official Guide to Eastern Asia*** の存在を知り、その第一巻が満洲・朝鮮であることや、この第一巻の出版年が1913（大正2）年であることを知り、この時代にこうした旅行案内書がつくられていたことにある種の驚きを感じました。

木田…私は美術館に在籍していた2012年に、「越境する日本人―工芸家が夢見たアジア1910s-1945」という展覧会を企画したのですが、この時に朝鮮総督府が出した『**朝鮮旅行案内**』という本に出会いました。

町ごとの人口や現地の学校のことなどが書かれていて、自分のイメージする旅行ガイドとは随分違うという印象を受けました。例えば当時のソウルの40万人の人口のうち10万人が日本人となっていて、その数字の大きさにも驚きましたし、生活に関する情報も多く、そこに暮らしていた日本人の生活がとてもリアルに感じられました。

山口…私は最近、ジャパン・ツーリスト・ビューローの創始者である木下淑夫（よしお）の遺稿集『**国有鉄道の将来**』を繰り返し読んでいます。単にお金儲けや日本のプレゼンスを上げるためにインバウンド誘致を行うのではなく、多くの人びとが世界を移動する観光の新時代に、極東アジアの国が何をすべきか、そして国際観光と民間交流はどのようにあるべきか、という大局的な観点に立った木下氏の思考には、今も学ぶところが多いと感じています。

山口 誠

獨協大学
外国語学部
交流文化学科
教授

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士（社会情報学）。専門は観光研究、メディア研究、歴史社会学。主な著書に『ニッポンの海外旅行』（筑摩書房、2010年）、『グアムと日本人』（岩波書店、2007年）、『英語講座の誕生』（講談社、2001年）、『「地球の歩き方」の歩き方』（共著、新潮社、2009年）など。

『「地球の歩き方」の歩き方』山口さやか／山口 誠、新潮社、2009年

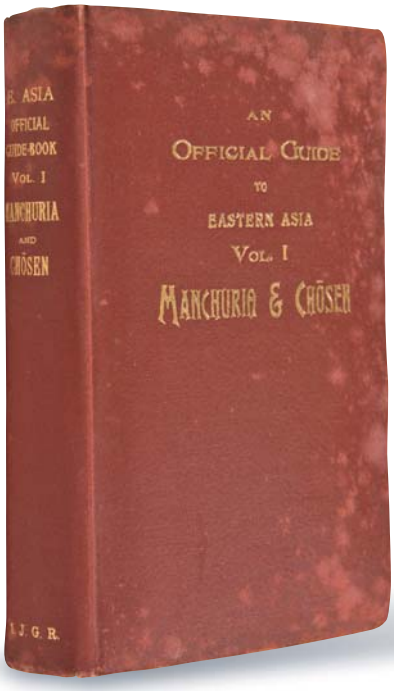
荒山先生が紹介された *An Official Guide to Eastern Asia* も、後藤新平・鉄道院総裁のもとで木下氏が制作に関わったとされる、印象深い本です。いま読み返しても、じつに詳細な情報と豊かな描写に満ちていて、驚くほど完成度の高いガイドブックだと思います。

ちなみに同書が誕生した1913年は、ジャパン・ツーリスト・ビューローの機関誌「**ツーリスト**」が創刊された年でもあり、さらにはイギリスのジョン・マレー社から出版された英文の日本旅行案内書 *A Handbook for Travellers in Japan* の最終版が発行された年でもあります。そう考えると1913年というのは、日本の観光の歴史において意義深い年だと思います。

荒山…旅行案内書が多様化したというお話に関連しますが、戦前に発行された『**南洋案内**』も興味深い内容でした。南洋協会というところが出しているのですが、観光旅行の話は登場せず、100%移住に関する内容でした。旅行案内書という書籍が持っている裾野の広さを感じましたね。

また、北海道や樺太、満洲への旅行案内書にもそういう傾向があり、開拓や移住、生活一般についての情報などが書かれていて、旅行という言葉が示すイメージが現代とは違うと感じました。

山口…戦前はもちろん、1960年代ごろまで日本では海外移住もさかんに行われていたので、今の方が旅行や観光をめぐるイメージのサイズが、意外なほど小さくなっている。例えば3泊4日で食べて買い物をして、というイメージの海外旅行を推し進め



An Official Guide to Eastern Asia Vol.1 Manchuria & Chosen
鐵道院、鐵道院、1913年

「木下淑夫と木下文庫」

『故木下淑夫君年譜』ジャパン・ツーリスト・ビューロー、ジャパン・ツーリスト・ビューロー内（木下文庫）、1939年

木下淑夫（1874–1923）

木下淑夫は、日本の鉄道の近代化に大きく寄与した人物として知られていますが、実はジャパン・ツーリスト・ビューロー（以下、ビューロー）の生みの親でもあり、日本の観光黎明期に大きな役割を果たしました。

1874（明治7）年に京都府に生まれ、大学では土木工学、大学院では法律と経済を専攻した木下は、明治32年に逓信省鉄道作業局に入局しました。2度にわたる海外留学や海外で開催された鉄道連絡会議への出席などを経験し、国際感覚を養うとともに、先進的な各国の鉄道・観光事情を肌で感じていました。こうした中、諸外国の日本に対する意識の低さに落胆。多くの外国人に日本を理解してもらうためには日本に来てもらうことが一番と考え、帰国後すぐに国際親善と国際経済振興の最良策として外客誘致の必要性を説いてまわり、1912（明治45）年にビューローが設立されました。

木下は観光事業においては、ビューローの設立や国立公園調査の実施、外客に向けた案内記 *An Official Guide to Eastern Asia*（全5巻）の編纂などをおこない、鉄道事業においては旅客貨物の運輸規定の改正、食堂車の開始、定期回数券の大衆化、汽車時間表の統制、特急列車の運行などをおこないました。木下は夢想家であったと同時に企画の才に富む理想家であり、利用者本位で様々な改革を成し遂げていきました。

1923（大正12）年、多くの人に惜しまれながら49歳という短い生涯を終えますが、木下の意思を継いだ多くの後輩たちが日本の鉄道・観光政策を担っていくことになります。

1929（昭和4）年の7回忌には、有志によって木下文庫が設置されました。木下文庫には木下の蔵書をはじめ、ビューローの初代監事である生野團六や国際観光局初代局長の新井堯爾などの蔵書なども収蔵されましたが、残念ながら太平洋戦争でその多くが散逸したとされています。当館では90冊ほどの古書を木下文庫として受け継いでいます。

木田拓也

武蔵野美術大学
造形学部教授

早稲田大学第一文学部卒業後、佐倉市立美術館学芸員、東京国立近代美術館工芸課主任研究員などを経て現職。博士（文学）。主な著書として『工芸とナショナリズムの現代「日本的なもの」の創出』（吉川弘文館・2014年）、『日本の20世紀芸術』（共著・平凡社・2014年）、『近代日本デザイン史』（共著・美学出版・2006年）などがある。これまでに担当した企画展は「東京オリンピック1964デザインプロジェクト」（2013年）、「ようこそ日本へ：1920–30年代のツーリズムとデザイン」（2016年）など多数。

『ようこそ日本へ：1920–30年代のツーリズムとデザイン』
東京国立近代美術館 編（木田拓也）、東京国立近代美術館、2016年

るガイドブックが主流になって久しいですが、しかし昔は長く旅するという意味での移住があり、また数年かけて海外をめぐる長期旅行もありました。そういうことも古書は教えてくれますね。

荒山…*A Handbook for Travellers in Japan* でも、前半には日本のさまざまな情報が記載されています。旅行案内と言いつつ、かなり長期間にわたって日本に滞在する外国人にも役立つ内容になっています。

先ほど、木田先生から『**朝鮮旅行案内**』に人口の情報が載せられていたというお話がありましたが、現在の旅行案内書では旅行先の人口などが書かれてあることはあまりないと思います。しかし戦前のある時期まで、旅行案内書は地誌の役割も果たしていたんですね。現代の旅行案内書よりも、もう少し客観的に地域の状況が書かれていたと思います。

古書を取り巻く環境

日本の観光の成り立ちや現在地点をクリティカルに問う歴史研究をどう社会に還元するか

事務局…なるほど、日本の観光の黎明期における地域の状況や、旅行形態、観光政策などがリアルにわかる訳ですね。一方で、こうした日本の観光史はまだまだ知られていない部分も多いと思います。古書という性格上、閲覧できる環境が少ないことも一因でしょうか。

荒山…ここ20年間ぐらい、旅行に関する古書資料を集めてきた経験からすると、インターネットが発達したおかげで、今は非常に手に入りやすくなりました。古書店を回って1点ずつ資料を集めていた時代に比べると、格段に便利になりました。もちろんこれは旅行史の研究に限りません。あらゆる学問分野において古書資料を用いる研究の環境は向上しましたし、日本にいながら外国の古書店の本や資料も買いやすくなっています。

山口…その反面、私が常々感じているのが、古いガイドブックなど観光系の古書はすぐ廃棄され、長期保存されにくい面があるということです。

荒山…一般的に旅行案内書は、情報が新鮮でないと商品価値が下がるので毎年のように更新されますね。消費者にとっては過去のものは価値が低いのかもしれませんが、研究資料としては情報が新鮮でなくてもいいのです。

山口…確かに古いガイドブックは、単体では価値が定まりませんが、過去から欠かさず全部揃ったコレクションになると、観光史などを研究する上で、劇的に利用価値が高まると思います。

事務局…2年前に当館が南青山に移転し、開館1年目で閲覧が多い資料の上位は、圧倒的にガイドブックの「るるぶ」です。とは言え、最新号を見に来ている人がたくさんいるのではなく、一人で同じ地域の「るるぶ」を何年分かに渡ってまとめて閲覧するケースが多いです。おそらく学生が研究対象として利用しているのだと思います。

山口…その事実は非常に重要だと思います。旅の図書館のような専門図書館や、発行元には、過去に発行されたガイドブックをぜひ保存していただきたいですね。２０２０年に向けて東京オリンピック・パラリンピックに関する印刷物の配布もはじまっていますが、それらを保存しておくことも必要だと思います。

木田…私は観光学という存在を長く知らず、「**ようこそ日本へ：１９２０－３０年代のツーリズムとデザイン**」という展覧会を２０１６年に企画した時に、初めてそういう研究領域があることを知りました。グラフィックデザインの世界では、日本の観光イメージを扱ったポスターや国際観光局が発行し*TRAVEL IN JAPAN*という雑誌などに、そうそうたるデザイナーが関わっています。観光は予算が相当つぎ込まれた領域であり、新しい実験的な試みも行われていて、当時のデザイナーにとって観光が大きな仕事だったことは、有名デザイナーたちの関わり方で感じますね。

　それらの事実を、観光という軸で統合する視点がそれまでの私にはまったくなかったのですが、観光史という観点で眺め返してみると、改めて見えてくるものがあると思います。

荒山…観光史の研究は歴史学の一部門かもしれませんが、観光や旅行は歴史研究の中では十分になされてこなかったように思います。地理学にも観光地理学という分野がありますが、どちらかというと観光地形成などの研究が主流で、旅行や観光の歴史そのものに注目した地理学研究はとても少ないように思います。旅行案内書の資料的な価値も、必ずしも高く評価されてきたわけではありません。

山口…まったくそのとおりで、日本政府が観光立国を掲げ、民間でもこれだけ観光が注目される中、そろそろ日本の観光の成り立ちや現在地点をクリティカルに問う歴史研究や、その社会還元の方法を、しっかり考えていかねばならないと思いますね。

旅行案内書の変遷にみる社会の変化

事務局…1つの旅行案内書を経年で揃えておくことも重要ですが、時代を追ってさまざまな形態の旅行案内書を概観すると、当時の地域の状況や旅行形態以外にもさまざまなことが見えてきますよね。

荒山…古い旅行案内書を手にしてまず感じるのは、1冊の案内書を作るために非常に手間がかけられているということです。これもやはり旅行に限らず、印刷出版物の持っていた価値や意味が今より大きかったのだと感じます。

木田…今の観光の印刷物などは写真が主体ですが、戦前はイラストが中心です。描かれているのは、富士山や桜などおきまりの題材が多いですが、写真を見慣れた今の学生から見ると、イラストで日本の観光イメージを作ることが新鮮に映るようです。

特にポスターに関しては、今は4色のオフセット印刷が主流ですが、当時は日本画のような色合いを出すために16枚も版を使用して工夫を凝らすなど、相当のお金と時間をかけていますね。その一方で載せる情報量は限られ、「JAPAN」という文字しか書かれていなかったりしますが、インパクトはとても強いです。

荒山…例えば江戸時代によくみられた道中記は、現在も存在するマニュアル的な旅行ガイドにあたると思います。書かれている情報量は少ないかもしれませんが、宿泊や飲食の場所、次の宿場までの距離など具体的な情報が書かれています。

一方で、1830年代に製作された歌川広重の『東海道五十三次』や葛飾北斎の『富嶽三十六景』などの木版風景画は、現代の風景写真集のように、旅行のイメージを喚起し誘うメディアとして普及していたと思います。木版印刷は非常に手間がかかるもので、明治初期には銅版印刷が普及し、明治20年代ぐらいからは活版印刷が一般的になって、旅行案内書も大きく変わります。

山口…テレビもインターネットもなかった時代、ポスターや印刷物の影響力は大きかったと思いますし、荒山先生がおっしゃるように、旅行メディアにマニュアル型とイメージ喚起型の2種類があるという系譜は、江戸時代から現在まで連続している側面があると思います。

荒山…そうした基本は変わらないのですが、明治期に鉄道が登場して旅行にも鉄道が使われるようになると、旅行そのものや旅行案内書には大きな変化がもたらされます。移動する人の数が圧倒的に増え、大幅に移動時間が短縮され、しかも旅行費用が安くなった。鉄道の出現によって旅行する母集団が増え、旅行の質とマニュアル的な旅行ガイドもイメージ喚起をするメディアも、その内容が大きく変わったと考えられます。

山口…それまでは移動するプロセスも旅行の大きな要素だったのが、鉄道の出現によって移動時間が大幅に短縮され、目的地で過ごせる時間が長くなりました。それに伴って、「行った先で何をするか」がより重要視されるようになったと思います。移動のかたち、つまりモビリティの変化が、旅行の質や形をシフトチェンジさせていったと言えますね。

旅行メディアについても、鉄道の出現によって道中記的なマニュアルがいわば複線化して、観光スポットや食事、宿泊など行った先で何をするかについて紙幅を割くガイドブックが現れ、ある時期から種類や数も大きく増えたと思います。

古書から得られる示唆を現代にどう活かすか

発想の転換や新たな価値を創造するための古書

事務局…古書の魅力や面白さを、さまざまな角度からお話しいただきました。古書から今なお学べることも多いと思いますが、そうした側面を現代でどう生かしていけばよいでしょうか。活用の方法や可能性についてお考えをお聞かせください。

山口…例えば、今のインバウンド政策がこれで良いのだろうかと考える際に、日本のインバウンド誘致の原点である、100年前の喜賓会の姿勢をひもと

「旅行案内書の系譜」

我が国の旅行案内書のルーツは江戸時代にあるといえます。徒歩での旅行がメインであった江戸時代は、街道図や街道沿いの名所、宿場の場所、名物、距離などを記した「**道中記**」や、名所を図で表した「**名所図会**」が旅行案内書の役割を担っていました。

1880年～1900年頃にかけて全国の鉄道網が整備されると、『**鉄道院線沿道遊覧地案内**』や『**鉄道旅行案内**』に代表される旅行案内書を私鉄や国が発行します。さらには、満州や樺太を案内したものも日本語で多く出版された他、大阪商船や日本郵船などの船舶会社によって、大陸や世界一周を旅行する案内書が出版されました。

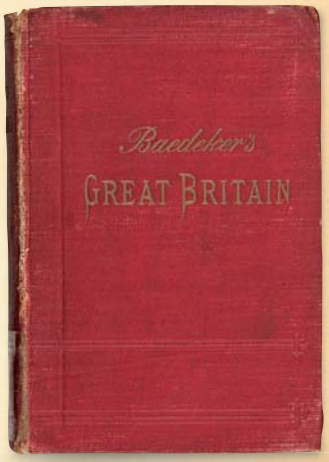
1894年に日本初の時刻表である『**汽車汽船旅行案内**』（庚寅新誌社）が発売されると、時刻表も旅行案内書の役割を果たすようになります。

ところで、世界中の旅行者が熱い信頼を寄せていたのが、ドイツのベデカー社やイギリスのマレー社のガイドブックでした。日本でもこれらを意識し、10年の歳月をかけて*An official guide to Eastern Asia*（鉄道院、1913年）全5巻を制作したほか、1929年には鉄道省が総力をあげて『**日本案内記**』（全8編）を発行しました。

1912（大正2）年にジャパン・ツーリスト・ビューローが設立されると、翌年に機関誌「**ツーリスト**」を発行しますが、同誌の付録版として出された避暑地紹介が好評を博したため、避暑のみならず四季を通じた一般旅客のための旅行案内書として『**旅程と費用概算**』（1920年～1940年）を出版しました。当時、一般的な旅行案内書が美文調だったのに対し、目的地への交通手段と費用、時間、旅程案がわかりやすく正確に記載された様式が広く受け入れられました。その後、ほぼ毎年増補改訂され、1939（昭和14）年には1000ページを超える大著となったため、地域別に分割した『**ツーリスト案内叢書**』（のち『**東亜旅行叢書**』→『**旅行叢書**』）に引き継がれ、戦後の『**新旅行案内**』『**最新旅行案内**』『**ポケットガイド**』へと継承されていきました。

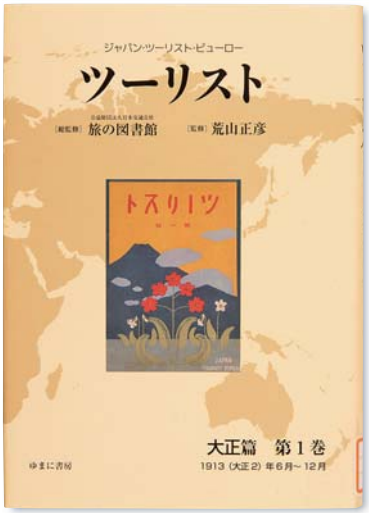
『鐵道旅行案内』鉄道省、1921年

『旅程と費用概算』ジャパン・ツーリスト・ビューロー、1928年



GREAT BRITAIN、KARL BAEDEKER、1910年

『**国有鉄道の将来**』木下淑夫、1924年



「**ツーリスト**」（復刻版 第1期 大正篇）荒山正彦 監修、ゆまに書房、2017年

くことも意味があるかと思います。先日、私のゼミ生が「喜賓会の英文ガイドブックからインバウンドの価値を考える」というテーマの研究をしましたが、当時の訪日客に向けた興味深いサービスや商品やホテルなどの情報が満載でした。なかには、いまもあれば面白いのに、と思うような「消えてしまったNIPPON」があったり、また観光スポットとして芝公園や東京帝国大などが紹介されていたり、今のインバウンド振興とは随分違うなと。

木田…戦前にはインバウンド誘致のために多くの観光ポスターが作られました。外国人に観光に来てほしいというのも当然あると思いますが、それだけでなく、日本という国の対外的なイメージ作りという要素もかなり大きく、だからこそ、いろいろなデザイナーが関わって力を入れていたのではと思います。

こうした観光に関するイメージづくりは、実は直接旅行に関わらない部分も大きいと思います。日本人が対外的に自分のイメージをどう思い描いてほしいかという「自画像作り」という面もあったのではないでしょうか。

また、こういうポスターが直接訴えているわけではありませんが、観光や旅行は平和であってこそ楽しめるものなので、いかに戦争を回避するかという願いもそこにはこめられていたと思います。

山口…自画像という言葉は素晴らしい視点ですね。当時はある種、グローバルな移動体験に対する公共心みたいなものがあり、移動する者を支える精神と、移動することに対する寛容心が、今とは違うレベルで存在していたと思います。

世界最初の近代的な旅行会社と言われるトーマス・クック社も、公共心から観光を組織し、ツーリストを支えていたことが知られています。さきほど話に出た木下淑夫も、海外留学中にそうした欧米の精神に感銘を受けたようで、1912年にジャパン・ツーリスト・ビューローを創設した時、「移動する者に寛容であれ」という言葉を残しています。

荒山…そもそも旅行や観光は独立して歴史を歩んできたわけではありません。例えば鉄道の誕生や印刷技術の近代化、あるいは写真の登場などによって旅行のスタイルは影響を受け、時代とともに変化してきました。旅行は私たちの社会が生み出したものであるからこそ、旅行の歴史を考えることは私たちの社会がどう歩んで来たかを考えることに他なりません。したがって、旅行に関連する古書資料を通して、私たちの社会が歩んできた姿そのものが見えると思っています。

山口…インバウンド誘致についても、現在ある形が最善でもなければ唯一でもありません。日本は100年前からインバウンド誘致を行っており、近代日本の観光はインバウンドから出発したと言えます。

そういう意味では、喜賓会のガイドブックや**木下淑夫の遺稿集**などは、改めてインバウンドについて考える材料になると思います。オーセンティックな日本を見せるだけでなく、訪れる側と受け入れる側の間で新しい価値を創出するインバウンド誘致があってもいいと思いますし、発想の転換や新たな価値を創造するのに、こうした古書が役立つのではないでしょうか。

また、私は最近、「観光を観光する」ということを、ツーリズム・リテラシーの実践の一つとして考えています。例えばイザベラ・バードの経験した日本旅行の足跡を辿ったり、明治・大正・昭和期のガイドブックを片手に観光地を訪れてみたり、他者が行った観光や過去に行われた観光を追体験するというこ

とです。他人の旅を体験することは新しい考え方ではなく、松尾芭蕉の足跡を小林一茶が辿った例などがあります。

そうして「観光を観光する」ことで、今ある自分の人生を相対化でき、新たな発見も生まれます。「観光＝消費」では決してなく、そうしたきっかけとなるのが観光の一つの役割であり、そこで役立つのが古書ではないかと思います。

また、各地域も最近はいろいろな形でストーリーを編み出そうとしていますが、歴史からそれぞれの個性を掘り起こすというのは大事です。やはり、古書からそうしたヒントが得られるのではないかと思います。

今後の旅の図書館への期待

旅行・観光に関する知の集積拠点、〝通訳者〟としての役割

事務局…それでは最後に、今後の旅の図書館への期待や求められる役割についてお聞かせください。

山口…機関誌「ツーリスト」が復刻したのは、荒山先生と旅の図書館の大きな功績だと思います。過去のガイドブックが復刻されたり、データベース化されることでいろいろな研究ができるので、古書の可能性を考えると、そのように環境整備するという仕事も大変重要だと強く感じています。

荒山…旅の図書館に対しては、旅行に関する知が集結している場、アーカイブズになってほしいと思います。今までそういう場がなかったのですが、求めている人たちはたくさんいると思います。

トーマス・クック社の資料室　Ｔｈｏｍａｓ Ｃｏｏｋ Ａｒｃｈｉｖｅｓ がイギリスのピーターバラという町にありますが、そういった海外のアーカイブズとの積極的な提携を期待しています。

山口…先ほど木田先生が「自画像」とおっしゃいましたが、ジャパン・ツーリスト・ビューローの創始者であり、日本の近代観光に深く関わった木下淑夫のさまざまな資料をアーカイブ化することが、旅の図書館の描くべき自画像ではと思います。実現すれば、新たな観光のアイデアが出てくる宝庫になるのではないでしょうか。

木田…本や雑誌は図書館などできちんと保存されますが、書籍や定期刊行物に属さない観光関連のチラシやカタログ、絵はがき、映像などは、当時を知るのに非常にいい資料です。しかし、今のところコレクターに頼るしかなく、探すのが難しいという現状があります。図書館という名前に縛られず、観光に関わるいろいろなものが集まる受け皿のような役割を果たしていただけると素晴らしいなと思います。

荒山…実物の古書にふれられる場であることも重要です。復刻版の意味も大きいのですが、やはり原本を手にして、木田先生がおっしゃるように表紙の色合いを見たり、紙の質感を感じることが大事だと思います。

事務局…当館に来る学生さんからは、古書を見るのが楽しいという声を聞きます。

山口…最初は反応が悪くても、ちゃんと価値を伝えてから現物に触れてもらえば、おそらく学生たちは楽しいと感じてくれると思います。やはり学生には古書の実物を見せないと教育にならないですね。私も学生達には「図書館で古書を1ページでもめくって、ちゃんと実物を見て」と言っています。

一方、古書のなかには読み解くのにプロフェッショナルな技術や学術的な訓練が必要なものもあります。その価値をうまく伝えられる方法を考えないと、観光の学術と現場の間の乖離が激しくなってしまうという危惧もあります。現代の人たちにも理解してもらえるような「通訳者」がいればいいのですが、古書をきちんと再評価して、どういう面白さがあるのかを伝えることを専門とするガイドブックやイベントや学芸員なども必要かもしれませんね。

事務局…古書の魅力や可能性について、示唆に富んだお話をいただき、ありがとうございました。現代につながるヒントがたくさんあり、今後の観光政策に生かすためにも、古書の魅力をかみくだいて広く伝えることが大事だと感じています。これから旅の図書館が所蔵する豊富な一次資料をどう活用するか、本格的に検討する時期に来ていると思います。先生方や他の専門図書館などとネットワークを作りながら、一緒に取り組みを進めていければと思います。

ジャパン・ツーリスト・ビューロー機関誌「ツーリスト」

「ツーリスト」創刊号

ジャパン・ツーリスト・ビューロー発足当時の事業計画には、2つの出版物の発行が掲げられています。1つは日本紹介のために海外へ配布することを目的とした英文日本案内『JAPAN』（1913（大正2）年11月発行）で、もう1つがビューローの機関誌「ツーリスト」（1913（大正2）年6月創刊）です。

「ツーリスト」は国内外が提携して世界のツーリスト事業の発展を期し、国際親善を図ることを目的としたもので、ツーリストビジネスを促進するための論説やビューロー本部・支部などの業務報告、外客の来訪状況、各地の遊覧案内などが掲載されました。

創刊当時の編集体制は、ビューローの初代監事であった生野團六が編集長をつとめ、翻訳を勝俣銓吉郎とC・F・スチーブンスが、表紙をグラフィック・デザイナーの杉浦非水が担当しました。両氏は『JAPAN』と「ツーリスト」が縁となり、ビューローの発行物に大きく関わっていくことになります。正確な内容と質の高い英文は誰からも信頼され、ビューロー刊行物の伝統の基礎が築かれました。

第3号からは英文欄が追加され、ビューロー会員のほか、国内外のホテルや自治体、商工会議所、大使館、新聞社、旅行会社、各協会などに配布されました。1916（大正5）年には編集方針を見直し、会報誌としての性格から、趣味と実益を兼ね備えた研究誌的な方向に重点が置かれました。1919（大正8）年夏からは東宮殿下にも献本したとの記録が残っています。

当時は、外客誘致に対する考え方がなかなか理解されず、多くの誤解や偏見がありました。ビューローの仕事が余計な道楽仕事のように思われる傾向もあり、「ツーリスト」の発刊は国民の意識醸成に加え、社内と国内のインナーキャンペーンの目的もあったのではないかと考えられます。

1936（昭和11）年7月には日本語の記事を雑誌「旅」に併合し、ツーリストは英文誌となりました。その後、1941（昭和16）年5月「ツーリスト・エンド・トラベル・ニュース」と改題しますが、太平洋戦争のさなかに廃刊となりました。

「ツーリスト」は1910年代から1930年代にかけての観光史をひもとくことができる資料として多くの研究者に活用されており、旅の図書館では1924年創刊の雑誌「旅」とあわせてデータでご覧いただけます。

また、2017年からはゆまに書房より「ツーリスト」復刻版が順次発行されています。

参考文献

『国鉄興隆時代 木下運輸二十年』日本交通協会、日本交通協会、1957年

『旅の文化誌 ガイドブックと時刻表と旅行者たち』中川浩一、伝統と現代社、1979年